

奈良の駅 シリーズ Vol.08



うねび

駅名：畝傍駅



畝傍駅舎(3代目)

【駅舎概要】

所在地：橿原市八木町二丁目1

区域区分等：商業地域

構造・規模：木造

建設時期：昭和15年

【沿革】

明治26年5月：大阪鉄道（初代）の

高田駅-桜井駅間延伸により開業

明治33年6月：買収により関西鉄道の

駅となる

明治40年10月：国有化により帝国

鉄道庁の駅となる

大正13年11月：吉野鉄道（現在の

近鉄吉野線の前身）が橿原神宮前駅

（初代）から延伸し当駅に乗り入れ

昭和27年4月：近鉄小房線廃止、国

鉄単独駅に戻る

昭和46年11月：貨物の取り扱いを

廃止

昭和59年10月：桜井線 CTC 化によ

り駅員無配置化、荷物扱い廃止

昭和62年4月：国鉄分割民営化によ

り、西日本旅客鉄道（JR 西日本）の

駅となる

JR 万葉まほろば線の駅シリーズ第8回は、畝傍駅です。橿原市の中心市街地にあり、橿原市庁舎、世界文化遺産を目指している藤原京跡や今井町重要伝統的建造物群保存地区が近くにあります。また、神武天皇陵や橿原神宮参拝の最寄り駅であり、天皇、皇族が度々ご利用されました、貴賓室が残されています。JR 西日本の駅舎コンパクト化の方針に対し、奈良県建築士会ははじめ市民団体が駅舎を保存活用する要望活動をしています。

■歴史・周辺環境

畝傍駅は、神武陵への参拝を目的とし大阪鉄道（初代）の駅として明治26年に開業されました。現在の駅舎は3代目で、紀元2600年にあたる昭和15年に昭和天皇の橿原神宮行幸に際して建築され、重厚な寺社風の木造駅舎で貴賓室も設けられています。棟札により、施工は水野工務店で請負人名義は木下組で、昭和14年11月起工、昭和15年の1月竣工で工期が短かったことがわかります。

駅舎は、JR 万葉まほろば線の北側に位置し、駅前には奥行き約30mの広場があり、現在は有料駐車場となっています。西から東に、貴賓室、駅務室、待合室、団体改札口、便所が配置されています。建築当初は紀元2600年奈良県奉祝会事業で多数の乗降客が見込まれ、団体改札口の東側南北方向に団体待合室がありました。ホームは駅舎より高い位置にあり、駅舎とホームは階段およびスロープで結ばれ、階段は現在使われている出入口（改札口）を結ぶものと、貴賓室とを結ぶもの、団体用出入口（閉鎖）を結ぶ3つが設置されています。

■保存・活用

JR 西日本は、コスト削減のため利用者の少ない駅舎の改築・コンパクト化や、地元自治体への無償譲渡・民間活用を進めています。畝傍駅もその検討対象で、橿原市は無償譲渡の申し入れに対して、当初コスト負担が大きいとして申し入れを受けない方針を示していました。しかし、無償譲渡を受け入れ保全活用を検討するよう建築士会や市民団体からの要望や状況の変化により、橿原市は民間活用を再度調査する方針に変更されました。市民団体では、貴賓室の公開や、駅舎及び駅前広場を活用した「畝傍駅音楽マルシェ」や「奈良・町家の芸術祭」などのイベントを継続して行われています。



奈良・町家の芸術祭

【記：橿原支部 米村博昭】

みんなでつくり「愛される万葉まほろば線」

昭和25年7月1日に建築士法が施行されましたが、日本建築士会連合会は、この日を「建築士の日」と定め、全国で様々なイベントを開催。奈良県建築士会では6月30日に「みんなでつくり「愛される万葉まほろば線」」と題して桜井市で公開シンポジウムを開催しました。



(会場風景)

冒頭に中尾七隆会長の趣旨説明、そして開催地の松井正剛桜井市長が開催の挨拶をされました。

第1部は「活動報告」です。住まいまちづくり委員会伏見康司委員長から、この2年間進めてきた「駅を起点とした地域資源の掘り起こし事業」について、まち歩きによる発見(魅力等)、気になる景観、提案事項の報告がありました。次に桜井市で活動されている桜井まちづくり株式会社岡本健代表取締役からは「駅からの周遊性を高めるために」と題して、①地区まちづくり推進ビジョンの策定 ②サブリース事業 ③空き家活用民泊直営事業 ④ふるさと納税返礼品事業 ⑤桜井駅前地区整備・活性化事業について報告されました。続いて帝塚山大学法学部末吉ゼミ&文学部河口ゼミの方々から、昨年JR畝傍駅活用提案に応募した「大人の修学旅行・ワンデー畝傍ウォーク」を説明、JR京終駅から途中の駅及び沿線の魅力に触れながら、JR畝傍駅舎の保全活用問題に関心を持ってもらう、持続可能な集客の仕掛けについての報告があり、最後に住まいまちづくり委員でありJR畝傍駅舎の保全活用を進める会副代表理事の太田隆司氏より「駅舎の保全活用をすすめる」と題して、2004年のJR畝傍駅舎活性化懇話会の活用提言から現在までの取り組みについて報告がありました。



(第1部 活動報告)

第2部は世界的に活躍されている(株)イチバンセン一級建築士事務所の川西康之代表取締役から「公共交通の今後のデザイン」と題し講演がありました。



(第2部 講演会)

『「建築×デザイン×まちづくり」を武器とし、職域を超えた相互理解により良い未来をつくるため、我々は役割分担を明確にして進めている、未来のユーザー/市民の代弁者という立場である。また、デザインとは色やカタチや模様ではなく、課題解決のための手段、想いのカタチで、数字では推し量れない「色気の世界」であり、「色気の世界」とは「あ！いいな」という夢や憧れ、公共交通にそれがあれば皆が参加でき持続可能性が高まる。大事なことは公共空間における遊びの要素、それにより公共空間の価値・周辺の価値・地価が向上し、まちづくりマインドが醸成される。未来の鉄道は一般市民や利用者が駅や車内外で参加する形態になる。土佐くろしお鉄道中村駅のリノベーションでは、デザインの力で公共交通・公共空間を自分事化になるよう計画し、駅の中を公

園化、高校生は待ち時間に自習室として使い、利用者の愛着があり落書き一つない駅となっている。また近鉄結崎駅のリノベーションでは、延べ16回遍く市民とワークショップを重ね、一人でも多くの住民が鉄道駅と生活の未来を考えていただき、他人事ではなく自分事として捉えてもらうことで、「懐かしく新しい駅」を目指した。万葉まほろば線においては、パリ・ローマ・ロンドンに負けない歴史を持っているので、そこに負けない大胆な取り組みを期待する。』と話されました。

第3部は「シンポジウム」、大阪21世紀協会前理事長堀井良殷氏と(株)イチバンセン川西康之氏をコメントーターに、奈良県リニア・地域交通課深田課長、JR西日本近畿統括本部阪奈支社 児嶋一裕副支社長、桜井まちづくり(株) 岡本健社長と、当会 米村博昭前会長をパネラーに、中尾七隆会長が進行役を務め、万葉まほろば線について討論されました。



(パネラー)



(コメントーター)

1巡目は各パネラーより、それぞれの現状や感想等お話しいただき、それらを受けてコメントーターの川西氏より、万葉まほろば線は電車に乗る以外の目的が出来る先進的なモデルであること、鉄道の点と線ではなく面に広げる必要があり、それは行政ではなく市民の力しかない。堀井氏からは隣接する山の辺の道に来てるのはよいが、通過するだけで地元メリットが無い、そこにある空き家を活用しようとしても、法的に難しい現状である、更に活動を進めるにはキーマンが必要であること、またJR畝傍駅は建築士会が声を上げてくれたから前を向いているが、巻向駅は置き去りにされているとお話しがありました。2巡目は、先ず米村前会長よりJR畝傍駅舎保全活用については、JRと市だけでなく、広く市民等が参加した議論を要望され、児嶋副支社長からは、市が示す提案を見た上で協議したいとの返答。岡本社長から訪日外国人増加率で桜井が全国9位になったこと、また桜井を知ってもらうためにいかに発信するか今後の対策を説明。深田課長より駅舎も空き家も活用するには活用する者がないと成り立たない、活用は地域のコンセンサスも必要で、空き家も含めて地域の要望に対して行政も協力していくと話されました。

会場からの質疑回答の後、堀井氏より本日は有意義な学ぶ場であったこと、だれかがやってくれるのではなく自分がやる意思を持つことが大切で、そこには行政の協力も必要、奈良県の世界遺産も3つから4つになるが、纏向を中心とした大和古墳群が残る、奈良県建築士会にリードしてもらいたいし、今後の活動に期待したいと総評されました。公開シンポジウムで、行政、まちづくり団体、一般市民の方、建築士会会員等、総勢80名を超える参加があり、内容も大変有意義な結果となりました。

【記：奈良県建築士会副会長 紀本澄男】

今年度の全建女は、7月14日～15日、東京で開催されました。全建女は、東京⇄地方と2年に1度は東京開催となります。

今年度のテーマは、未来をつなぐ「まち・ひと・建築」～インクルーシブな社会を目指して～ということで、建築空間の中で最も狭い空間でありながら性別、年齢、障がいの有無に関係なく誰もが使うトイレを題材とし、お二人の基調講演をお聞きすることが出来ました。

1部はTOTO株式会社 真島香氏。パブリックトイレにおいて一人でも多くの人を使いやすいトイレを考えていく、その手法についてお聞きしました。身体的機能だけではなく、心理的な面での配慮が必要な方々へも、気兼ねなく使えるトイレとは？排泄をするという行為を目的とした空間の中に、その広さや必要な機能をどのように設けていくのかなど、多様な人々の利用実態やニーズを調査し、その事例を見せていただきました。

2部は、株式会社日建設計 畑島楓氏。畑島氏は、トランスジェンダーの当事者としてLGBTQ(性的少数者)を社会に理解してもらう活動に取り組んでおられる方で、自身の幼少期の体験をお聞きすることからお話はスタートしました。絵本の「スイミー」との出会いが、自分の考え方を前向きに捉えることができるきっかけになったことなど、実体験に基づく話に引き込まれていきました。トイレを考えるにあたり、建物サインを見て気付いたこと。それは、「どう使うか？」が描かれているのに対し、トイレサインは、「誰が使うか？」が描かれている。トイレは、「誰が使うか？」に境界線が引かれているのを「どう使うか？」に着目し、トイレにおけるアクティビティを整理し考えていったとのこと、その事例もご紹介いただきました。

トイレというすべての人が必ず利用する空間は、建築において決して切り離せないものであり、あらゆるひとをつなぎ、そのまちの様子にも影響を及ぼす。トイレのあり方について、この多様な考え方が、未来のあらゆるものをつないでいくのだろうと、感じた基調講演でした。

全建女終了後の2日目午後は、「THE TOKYO TOILET」プロジェクトのトイレ17か所の内、3か所、坂茂さん設計の「代々木深町小公園トイレ」、「はるのおかわトイレ」、隈研吾さん設計の「鍋島松濤公園トイレ」を見学し、満喫した2日間を過ごし、帰路につきました。来年は、7月19日～20日で山形大会です。一緒に行きましょう。

【記：女性委員会 寺岡春恵】

5月30日、日ごろ近鉄電車内から中門の横にまだ素屋根があるぐらいに眺めていた所が、本日の見学先の東楼。平城宮跡、南門横にある復原事業情報館で集合。昼1時半、日差しが照りつけるなか、30数名の応募があり、北、南、西それぞれの方向から南門を目指して歩くと、あらためて平城宮の広さを体感する。



まず現場事務所で、事業者の国土交通省近畿地方整備局京都営繕事務所ならびに施工者の竹中工務店から、復原事業全体の説明、復原整備工事は大工、左官、瓦などさまざまな伝統技能の継承が目的と説明頂きました。特に奈良の方や若者・学生にも見学してもらい、ものづくりに興味をもって頂きたいと願われていた。1997年に朱雀門、2010年に大極殿院が復原され1300年祭では奈良県じゅうが盛り上がった。この後も整備工事は続いていて、仮設であった南門は2022年大極殿門として復原。2025年完成予定の東楼は大極殿門をはさむように東西対称の位置にあり、大極殿の創建(708～715年)からは20年ぐらい後に築地回廊の一部を解体し、増築されている(730年前後)。このことは建築様式やデザインに違いができ、一番の驚きは外周部の柱が12mの掘立柱16本(発掘では15本)で構成されていることです。実際の作業場、素屋根工事現場へ移動して見学。掘立柱は実際には3m埋まっていたのが出土されていて(実物は展示されています)、復原でも同じように埋めて柱の周りは木栓で固定するように施工されていました。現在は瓦葺前の屋根野地工事で、垂木隅木など間近で見られる貴重な体験でした。見学の方々からは、大工、構造、意匠、瓦の専門的な目線での質問があり、現場作業中の宮大工さんから、掘立の基礎、垂木隅木、瓦の形状、屋根、組み方、引独鈷などのお話を伺うことができました。

みなさんはいつ平城宮跡に行かれましたか？東楼はいつでも一般公開されています。身近にこのような建築お手本があるにも関わらず、なかなか見る機会を逃していたと思いました。門とは違い、楼とは1つの屋根に2階以上がある建物で、東楼には2階があり、当時2階では宴会等が行われていたようです。建築の利活用も含めて平城宮跡国営公園が魅力あるものになればと感じました。

【記：奈良支部 久保陽洋】

お知らせ

●第42回 近畿建築祭「しが大会」

令和6年9月28日(土)に第42回 近畿建築祭「しが大会」が開催されます。

詳細は、以下のURL または QR コードをご参照ください。

<https://www.aba-osakafu.or.jp/info/2408/pdf/02.pdf>

お申込期限は、9月5日です。



●入会者のご紹介

伊伏 堅太郎 様 (奈良支部)

沼元 聡士 様 (奈良支部)

香川 拳宏 様 (郡山支部)

中村 正光 様 (生駒支部)

階戸 精一 様 (橿原支部)

人見 志衣奈 様 (高田支部)

よろしく願いいたします。

編集後記

『はじめまして』 この度、令和6年度より新たに情報・広報委員会に入りました本多です。建築士会の活動自体は郡山支部の方々と交流があった関係で、一緒にイベントに参加させていただいていました。令和5年度より、建築士会に正式に入会し、活動しています。また、令和6年度からは、情報・広報委員会に入りましたので、この場をお借りしましてご挨拶させていただきます。情報・広報委員会での活動は、まだ数回の打合せしか参加していませんが、建築士会の広報全般について広く検討されており、委員の方々が試行錯誤しながら、改善や工夫を進めてきたことを知りました。ちなみに、私自身は建築設計などの実務を

しているわけではなく、建築の業務をITで支援する仕事に従事しています。また、個人的な活動として、2017年頃から、シビックテックと呼ばれる「市民自らがテクノロジーを活用して地域課題の解決を目指す取り組み」に参画しています。大学は建築構造の出身でしたが、元々ITにも興味があり、どちらにも関わりたいと思っています。今回、情報・広報委員会に参画するにあたり、これまでの経緯や検討を生かしつつ、今のITツールでできることを試しながら、楽しく建築士会のことを広くしてもらうことに貢献できればと思っています。何卒宜しくお願い致します。【情報・広報委員 本多健一】

9月 15日(日) 二級建築士試験(製図)
28日(土) 第42回 近畿建築祭「しが大会」

10月 13日(日) 一級・木造建築士試験(製図)
25日(金)~26日(土)
第66回 全国大会鹿児島大会

士會奈良

通巻657号

令和6年9月1日(発行隔月1回1日発行)

発行所

一般社団法人 奈良県建築士会

〒630-8115 奈良市大宮町2丁目5-7 奈良県建築士会館

電話:0742-30-3111 FAX:0742-33-4333

WEBサイト:<https://nara-kenchikushikai.or.jp/>

e-mail:info@nara-kenchikushikai.or.jp

発行責任者

中尾七隆

編集

(一社)奈良県建築士会 情報・広報委員会



情報・広報委員会

委員長 伊藤 吉郎

副委員長 小西 直樹 福田 成生

委員 吉村 晃人 本多 健一

門脇 直也 高杉 明

永友 翔 松尾 憲治

上柿 範兼 松田 輝明

吉田 泰造 小松原寛俊

洞 尚樹 押部 誠

私の選択は
間違ってた
なかった

選んだのは、合格者の50%以上が
進んだ王道ルートでした。

総合資格学院イメージキャラクター
令和4年度 一級建築士試験合格 当学院受講生 伊藤
田中 道子さん

1級建築士
合格実績 No.1

平成26~令和5年度

1級建築士 設計製図試験

全国 10年間
合格者占有率

54.8%

全国合格者合計 36,470名中 / 当学院受講生 19,984名

※全国合格者数は(公団)建築技能教育センター発表による。 ※総合資格学院の合格実績には、模範試験のみの受験生、教材購入費、資料の提供費等は含まれておりません。(令和5年12月25日現在)

各講座のクオリティは上げながら
受講料を値下げしました

PRICE
DOWN

詳細は奈良校まで!

総合資格学院



開講講座

建築士/建築士木・管工事施工管理/設備・構造設計1級建築士/建築設備士/宅建/賃貸不動産経営管理士/インテリアコーディネーター

お問合せ先

奈良校 TEL:0742-30-1511